

センタージャーナル

〒460-0016
名古屋市中区橋二丁目8番55号
TEL (052) 323-3686
FAX (052) 332-0900

■発行人／荒山 淳

■発行所／真宗大谷派名古屋教区教化センター



御影堂で車座になり「私にとっての真宗本廟」を語り合う。(4・5面)

立つ！
いのちの大地に
聞く！
いのちの叫びを
真実の学びから、
今を生きる「人間」としての
責任を明らかにし、
ともにその使命を生きる者となる。

もくじ

- ・ 聖典研修 『仏説阿弥陀経』 —その教義と真宗の儀式— ②・③
- ・ 研究生実習 私にとって真宗本廟とは ④・⑤
- ・ 真宗門徒の講と 葬儀に関する覚書 ⑥・⑦
- ・ INFORMATION ⑧

◆イラストカット集(※寺報などにご利用ください)

(写真の無断転用はご遠慮下さい。)

明らかにして闇くらきことなきがごとし

師走に入り足早に歩くなか、名古屋の繁華街の街路樹には青色LED(発光ダイオード)のイルミネーションが飾られ幻想的である。この地縁ゆかりの研究者のノーベル物理学賞授賞で青の輝きが増す。

平成御修復が完成し再建当時の輝きが蘇った御影堂に、有縁の方々と共に一日参拝をさせていただいた。ゆつくりと自分の歩幅で、その世界を感じ歩むなか、尾張から寄進された大柱に触れながら明治の御苦労を偲び御同行は言う。「こんなにじっくり過ごしたことはなかった」と。

(本誌四頁)
明治維新・文明開化・富国強兵と、まさに激動の時代。その再建当時の様子を夏目漱石は、

汽車ほど二十世紀の文明を代表するものがあるまい。(中略)人は汽車へ乗ると云う。余は積み込まれると云う。人は汽車で行くと云う。余は運搬されると云う。汽車ほど個性を軽蔑したものはない。文明はあらゆる限りの手段をつくして、個性を発達せしめたる後、あらゆる限りの方法によってこの個性を踏み付けようとする。

と『草枕』にあらわす。尊厳なるうちにんを積み込み運搬しひとつのモノと化していく文明の危うさに漱石は警鐘を鳴らす。街のガス燈の灯りが人の背後に陰影を作るように、文明開化の灯りは、同時に人知の闇を生んだ。まさにこの国は、近代文明という汽車に幾千万もの人をモノとして積み込み、日清・日露戦争と運搬し、そして太平洋戦争へと暴走した。

文明は加速し留まる時を待たず、原子力の平和利用を理念に掲げ、国内に原子力発電所が五十四基造られた。煌々と灯った原子力の灯りは、その光の強さに比例し闇をより深くした。

この平和は真の平和ではない。動物園の虎が見物人を睨めて、寝転んでいると同様な平和である。檻の鉄棒が一本でも抜けたら——世はめっちゃめっちゃなる。(『草枕』より)

明治の文豪が指摘した人知の闇は、幻想的な青の輝きによって照らし出された私の顔を不気味に浮かびあがらせる。明後年勤まる御遠忌で、私は何を確かめなければならぬのか。

(主幹 荒山 淳)

聖典研修

『仏説阿弥陀経』 — その教義と真宗の儀式 —

今年度より、教区教化委員会主催であった聖典研修が、当教化センター事業に移管された。これを契機とし、これまでセンター主催で開かれてきた研究生教化研修「真宗儀式の教相」の課題を踏まえ、新たに聖典研修を開いていくことになった。今号より、講義で提示された課題の一部を紹介したい。

第一回 九月十九日 (金)

『阿弥陀経』は「仏説」だと言えますか？

講師 竹橋 太氏 (儀式指導研究所研究員)



「仏説」としての『阿弥陀経』

『仏説阿弥陀経』は、お釈迦様が亡くなられて四百年以上経ってから作られた経典です。ですから、お釈迦様が直接、口で説かれた経典ではありません。「そういうことは言わない方がいい」という意見もあります。このことは学問的に証明され、世界に公開されていることなのです。

一方でありますが、我々は何故『阿弥陀経』を「仏説」として頂くことができるのか。これは一人ひとりが「仏とは何か」「仏教とは何か」ということを確認しないと答えられない問題です。その問いに目をつむって「お釈迦様が説いた」と言うことは難しいと思います。

そこで、「非仏説」と言われる大乘経典を、「仏説」としてどのように頂くのか。「仏説」をどう考えるか。自分なりの答えのようなものをお話ししたいと思います。

欧米の仏教研究

インドは十七世紀頃、イギリスによって征服されます。その後、時を経て十九世紀になってから、インドの仏教についての学問が始まります。

征服後、イギリスやヨーロッパの人々は遺跡などから、サンスクリットというインドの古い言葉で書かれた文書を発見しました。それは、自分たちが重んじている古典語であるラテン語やギリシャ語よりも、古い時代に形が整ったと想定できる言葉だったのです。そしてそのサンスクリットにより、ヨーロッパの言葉の原形を想定するような学問、比較言語学の研究が進んだのです。また、経典の言葉や文字だけでなく、その思想も注目され始め、仏教も研究されるようになっていきました。

そういうなかで、欧米で仏教を学ぶと言え、インドで発見されたうちでも原始経典と呼ばれる古い経典を学ぶこととされて

います。大乘経典は形式的に見れば、お釈迦様が直接説いたものではないため、欧米の学者たちの大半は偽物として重んずることがない。だいたいぶん変わってききましたが、まだまだそういう現状です。

経典の成立は分からない

しかし、経典の成立自体、何の記録も無いので詳しいことは分かってはいません。

お釈迦様の時代には経典はありません。人々はお釈迦様の話を聞いていたのであり、お釈迦様ご自身が経典でした。弟子たちは、その言葉を暗記していたのです。

その後、お釈迦様が亡くなってすぐに、弟子たちはお釈迦様の言葉を留めるため「第一結集」という経典編纂会議を開きました。そういう集いが三回ほど行われています。

ただ、「第一結集」の時にできた経典を特定することはできません。そして今残る古い経典といわれるものも、何度かの変遷を経て、貝葉と言われる木の葉に書写されるようになったのは、ずいぶん後の時代になってからだとされています。また、人々は貝葉を読んで暗記し、使います。古いものは朽ち、捨てられてしまふのです。そのため、考古学的史料も無い現状において、最も古い経典を完全な形で特定することは不可能なのです。またインドの言葉だからその経典は古いもの、とも言えないのです。

大乘経典は誰が作ったのか？

そもそも経典自体、お釈迦様が亡くなられてから作られたものなのです。その

ため、経典がお釈迦様の役割をしたわけですが、同時にお釈迦様がいない、無仏ということが課題になりました。

上座部仏教は、声聞と言われる仏弟子になることを目指しました。ところが、お釈迦様がいないわけですから、仏弟子になるということが全うしないのだと思います。お釈迦様が生きている間は、お釈迦様と法(仏と法)とが一つです。お釈迦様に認められれば、阿羅漢という位になります。

そういう所から、お釈迦様の亡くなられた後、つまり無仏の時代において、お釈迦様が出あった法に我々も直接出あう、ということになってきたのです。法(法身の仏)に出あうことによって私たちも仏になるのです。無仏の時代だからこそ、仏に成るといことが課題となったのです。

大乘経典は、その法の世界、覚りの世界が開示されたものです。浄土経典について言えば、お釈迦様の覚りが「浄土」という表現になっていったと言えるところがあります。覚りそのものが、我々を救うために、「浄土」という表現を生み出した。それはたとえば『教行信証』の「証卷」に述べられる「証」の展開(還相回向)として、浄土(真仏土、化身土の二土)が説かれたということと同じです。

誰が大乘経典を作ったのかは分かりません。しかし、お釈迦様の教えに出あって救われた人のところに、新しい表現が生まれていった。それは、法そのものが自己展開していったというのが一番適当だと思います。

無仏の時代の、仏に出あいたいという求め。そして我々が法そのものである仏に出あい、仏になっていく。そこから大乘経典が生まれ、大乘仏教が開示していったのだと思います。

第二回 十月三十日 (木)

あなたにとつて「浄土三部経」とは？

講師 廣瀬 惺氏 (同朋大学特任教授)



「生苦」という問題

『阿弥陀経』は「浄土三部経」の一つです。それで、これから『阿弥陀経』を学ばせていただくにあたり、まず「浄土三部経とは何か」「浄土三部経をどのようなものとしていただいでいくのか」についてお話しさせていただきたいと思ひます。

私たちが抱えている根本的な問題として、仏教では、普通「四苦」ということが教えられています。特に浄土仏教では「五苦」ということが教えられています。「五苦」とは生・老・病・死、そして愛別離苦です。

私はこの中で「生苦」というものがなかなか分かりませんでした。以前、テレビが何かで「生苦には二説ある」と聞いた記憶があります。一つは母親の産道を通ってくる時の苦しみ。もう一つは、人間は自分自身に生の根拠をもつていない、気付いたら生まれてきた、ということからくる苦しみです。

そういうことをお聞きしても、そういうことなのかなあと思つておりまして。しかし最近、年をとつてきて気づかされてきたことですが、「自分の人生とは何だったのだろうか」「何のために生まれてきたのだろうか」ということではないかと。それは、むしろ年をとつて

いいますか、先がなくなつてきて気づかされてくる、痛切なかたちで問題になつてくるものではないかと思ひます。そのように「生苦」とは、自分自身が生まれできたのはどういふことなのか、というよな問題ではないでしょうか。

さらにまた、時代社会の問題を抱えて生きているのが私たちであります。今日は今日の問題、以前に生まれた方はその時代の問題。どの時代でも差し迫つた問題を抱えながら、人間は生きてきたわけでしょう。そのようにして生きてこられた多くの方々が、そのような人生の意義を尋ね、また、それによつて道を見出し、こられた経典、それに生涯学び続けていかれた経典が、「浄土三部経」であると申し上げてよろしいわけでしょう。

「有縁の法に藉れ」という言葉

そのように、人生を訪ねて生涯導かれ続けていく教えのことを、善導大師は「必ず有縁の法に藉れ」として、「有縁の法」の一言で教えてくださっています。これは、そのこと抜きに人生・道は明らかになつていかなないということでしょう。私たちの仏教の学び方を示しておつてくださる大切な言葉ではないでしょうか。少しこの言葉を確認させていただき

と思ひます。善導大師は、行者当に知るべし、もし解を学ばんと欲わば、凡より聖に至るまで、乃至仏果まで、一切碍なし、みな学ぶことを得るとなり。

〔聖典〕二一九頁

とおつしやり、それに対して、もし行を学ばんと欲わば、必ず有縁の法に藉れ、少しき功勞を用いるに多く益を得ればなりと。

〔聖典〕二一九頁

とおつしやり、それに対して、

先に述べられております「解」に関する学び方の一文について、一般に「解学」と呼ばれています。解学と申しますのは知識的な学びと申し上げてよろしいでしょう。仏や、菩薩や凡夫とは何かということは、本や辞書、インターネットを見ればわかります。ですから、知識的に仏教を学ぼうと思ふならば、凡夫のことから仏のことまで全部学ぶことができるといふことです。

それに対して、「行を学ばんと欲わば」といふ方は「行学」と称されています。それは、自分自身に道、救いが明らかになる学びと申し上げてよろしいのではないのでしょうか。

誰に対する呼びかけなのか？

このお言葉について、私自身は、並列的に知識としての学び(解学)と、救いが明らかになつていく学び(行学)、そのような二つの学びがあるのだと了解しております。

それに対して、そうではないのだと教えてくださったのが宮城頭先生でした。大事なのは「行者当に知るべし」という呼びかけだということ。知識として学ぼうとしている人に対してではなく、自らの人生をかけて仏道を求めている人に対して呼びかけておられるということ。です。

そうしますと、この言葉は、単に知識的な学びと救いが明らかになる学びとの二つの学びがあるというよな呑気な話ではないわけでありましょう。「行者」に呼びかけられているということは、もし有縁の法が無ければ、結局、どんなに一生懸命に学んだとしても知識的な学びで終わるのだということ。自分の人生に、何も決着が着くことなく終わつてしまふのだということ。有縁の法が無ければ解学に終わるのだということ。です。

そういう意味では、有縁の法との出会い抜きには行学という学びは成り立たないといふこと。仏教の学びは、たとえ一度うなずいたとしても、さまざまな縁の中で見失つたり、分からなくなつたりしながら歩んでいくわけでしょう。そのような歩みの中で、常に立ち返り立ち返りしながら学んでいくことができる、歩みを徹底していくことができ、教え、そして私たちに道を開いてくださる教え、それが「有縁の法」なのでしよう。

そのような教えとして、多くの人々に学ばれ続けてきた教えが「浄土三部経」だと申し上げてよろしいのではないのでしょうか。

研究生現地研修

2014年10月2日

教化センター研究生が真宗本廟を案内 私にとって真宗本廟とは

真宗門徒講座（別院主催） 受講者など 九十人でバス団参

真宗本廟で得度し真宗大谷派の僧侶となり、教師修練を受け教師資格を有する研究生。僧侶条例に謳われている「真宗本廟を崇敬し、本廟奉仕に努めること」を誓約したのが、はたして、どれだけ本廟について知っているのか。

教化センターでは、このような問いから、名古屋別院教化事業部と協力し、別院主催の真宗門徒講座受講者をはじめとする有縁の方々に「そうだ！若いお坊さんと京都へ行くこう」というキャッチフレーズで本山参拝を呼びかけ、研究生が諸殿の案内役を勤める企画を十月二日に実施した。

昨年に引き続き今回で二回目となるこの企画に、「門徒七十六名が参加。研究生と別院職員ら十四名がスタッフとなり、両堂の参拝に加え、勤行・講義・諸殿拝観・座談と盛りだくさんな一日を真宗本廟で過ごした。

参加されたご門徒方からは、「真宗本廟に納骨、お参りしたことはあるけれど、こんなにじっくり過ごしたことはなかった」など、喜びの声が多数聞かれた。今号では、このたびの企画の一端を紹介し、各寺院での取り組みの参考にしていただけたらと思う。

バスの中で真宗本廟クイズ



研究生による真宗本廟クイズに大盛り上がり！

クイズの内容は、「御影堂の瓦の枚数」「両堂が現在の場所に建立されてから、何度焼失したか」「御真影がどのようにお念珠を持たれているか」など、四択クイズを参加者と楽しく事前の学びをした。「現在の両堂が江戸時代に四度も焼失した」との答えに、驚きの声がバスの

中に響きわたった。また、参加者から研究生が答えられない質問が出され、冷や汗をかく場面もあるなど、大いに盛り上がった。

東本願寺の両堂は誰が建立した？

バスから降りて工事中の御影堂門をくぐると、御影堂から親鸞聖人の御真影が出迎えてくださった。聖人にご挨拶した後、一行は同朋会館へ向かい、譽田和人参修部長のお話を聞いた。部長から「両堂は誰が建てたのでしょうか」の問いに、「うーん。何上人だったかな」と、首をかしげる我々。「ご門徒さんが建てたのです」という答えに、みんな納得。約五十分わたって「私にとって真宗本廟とは」について、研修部長と考えた。

当日の行程

- 7:00 受付（名古屋別院本堂前）
- 7:30 名古屋別院 発（大型バス2台）
- 9:50 真宗本廟 着
- 10:00 御影堂参拝
- 10:20 同朋会館にて入館式（勤行）
- 11:00 講義「私にとって真宗本廟とは」
- 12:00 昼食（同朋会館にて「合掌御膳」）
- 13:00 阿弥陀堂修復現場視察
- 13:30 班ごとに諸殿拝観
- 15:30 同朋会館にて閉会式
- 16:00 真宗本廟出発
- 16:30 おみやげ店で買い物
- 19:00 名古屋別院 着／解散



時間を延長して熱く語ってくださった譽田研修部長



工事中の御影堂門をくぐると、御影堂の正面で親鸞聖人の御真影が出迎えてくださった



心もはずむ昼食

※合掌御膳は1,200円でいただける（要予約）

昼食は同朋会館で

昼食は同朋会館でつくられた合掌御膳。旬の食材を取り入れたおもてなしに笑顔がこぼれる。みなさんこれからの日程が待ち遠しい！



御影堂を支える大柱は九十本。写真の柱は1885（明治17）年に名古屋の同行から献木されたもの。

明治度再建事業のご苦労を感じる

昼食を終えた一行は、六班に別れて座談を交えた諸殿拝観を行った。

御影堂では、どのようなお荘厳がなされているのかを皆で確認し、「どうしてこんなに広いお堂が建てられたのか」「明治度の再建事業はどのようなものだったのか」などについて、柱をなでたり、畳の温もりを感じながらの話し合いが行われた。

参加者からは、「個人でお参りしても眺めて終わるだけ。今回は、何もわからずに参加したが、いろいろと興味を持てた。多少なりとも知識があれば、次回真宗本廟に来る時には、思い入れが違ってくると思う」などの声が聞かれた。



昼食後、現在は公開が終わった御修復現場から阿弥陀堂の破風を前に語りあう参加者。

はじめて見る諸殿

普段は関係者以外は入ることができない諸殿に、参加者からは「緊張するね。わくわくするね」と、期待の声が続けられた。下の写真は大寝殿にある竹内栖鳳^{たけうちせいほう}によって描かれた襖^{ふすま}の絵。何者かによって切り取られた二羽の「喜雀^{きせき}」についての説明を受けると、参加者からは、「なぜ、そんなことをするの?」「よほどかわいい雀だったのかな」と、なごやかな雰囲気。「普段は入ったり、見たり聞いたりできないから、大変良かった」とても親切な解説をしてもらい個人では見られない様などころまで見学でき、有り難かった」など、喜びの声を多数耳にした。

案内役を勤めた研究生

ともに参拝した班の方々之乐しそうな姿が印象に残っている。私自身は少しもやもやした気持ちだった。毎回新たな感情を抱くことのできる団体参拝で、再度、本廟を訪れたい。

(第10期研究生 ^{たまこし あきひろ} 玉腰 暁広)

朝から晩までの過密な日程の中で、皆さんはいつも笑顔、バスから降りて足取りも軽やか。疲れた顔をしているのは私だけ。でも参加者の「ありがとう」の声で元気回復。

(第9期研究生 ^{たじましよう} 田島 晶)

参加者の方々が自然と手を合わせている姿や、御影堂で頭を下げる姿がとても印象に残った。自然にできるその姿に日頃の私の姿勢が問われる思いがした。

(第11期研究生 ^{なべの りょうご} 鍋野 了悟)

皆さんに、いかに楽しんでもらえるかを考え、レクリエーション企画から細部にわたり、事前に多くの下調べをして臨んだ。緊張し、動揺して言葉に詰まりながら、案内させていただきました。

(第9期研究生 ^{たみや あつり} 堂宮 淳賢)

日頃意識することのなかった真宗本廟。今回、案内役をする中で、この真宗本廟がこれからも護持相續されていく事を願わずにはいられなくなった。

(第11期研究生 ^{まつやま こうけん} 松山 公顕)

譽田和人研修部長の「また、いつでも帰ってきてください」という言葉が心に残った。「出かける場所」でなく、「帰る場所」として真宗本廟を参加者の皆様と確かめさせていただいた。

(第9期研究生 ^{あらやま ゆう} 荒山 優)

研修を終えて

研究生がひたむきに参加者と向き合うことで、自然とお互いの心が近づいている様子が見てとれ、帰りのバスも和やかに話し合いがもたれていた。この研修を終えた後、自坊でも40年ぶりの真宗本廟奉仕団に参加した。このたびの研修に習って、真宗本廟クイズや同朋会館の紹介ビデオを見てバスの時間を過ごした。座談会では、「これからのお寺はどうなっていくのか」と、月参りの会話では出てこない問いかけももらった。ご門徒と大事な時間を過ごすことができたとと思う。

(業務嘱託 ^{はやしひろゆき} 林 博行)



真宗門徒の講と葬儀に関する覚書

筆者はこれまで一貫して「真宗同朋会運動の源流を探る」をテーマに、尾張真宗の講組織を研究課題とし、『真宗大谷派名古屋教区教化センター研究報告』（以下『研究報告』）の第九集と第十集においてその成果を報告してきた。そこでは、聞き取り調査した尾張地域の講を紹介するとともに、今に受け継がれる真宗の講が中世の寄合文化に由来することを確認し（第九集）、同朋会運動と伝統的な講組織の関係を検討しながら、そこに孕まれる問題を論じてみた（第十集）。しかし、真宗の講が歴史の中で果たしてきた役割は多様であり、まだまだその全容を明らかにするには至っていない。特に、調査に訪れるたびに耳にしてきた、葬儀における同行の相互扶助については十分に検討してこなかった。近年、講の衰退・消滅が叫ばれるが、様々な講組織で話をうかがうと、実はそれが葬儀形態の変化によると感じることが多い。そこで、今後は「真宗門徒の講と葬儀」を研究課題としながら、真宗の講とは何であったのか、また今後いかなる可能性があるのかを明らかにしていきたいと思う。以下は、その手始めとしての現時点での筆者の覚書である。

最初に、愛西市下東川町の講組を例として、真宗の講で同行が亡くなった際の相互扶助を確認しておきたい。ただ、実際に葬儀が執行されている様子ではなく、平常時に集まっていた聞いて聞き取った内容であることをお断りしておく。

愛西市下東川町は、集落が五つの講組（北組・西組・中組・下組・河原）に分かれており、すべて同市鵜多須町の了慶寺と講下の関係にある。その中で調査にうかがった下組では、今もなお同行が亡くなった時には、会館等を使用することなく喪主宅にて、全体で「お取り持ち」をしながら葬儀を執行しているという。

この下組の組織構成は次の通りで、かつては十二軒であったが、十年ほど前からは十軒になり、手次寺を同じく了慶寺とする同行宅が五軒、それ以外の真宗寺院が五軒という具合で、尾張西部地域に見られる典型的な真宗の講組織である。ただ、毎月の寄合は現在行っていないようであったが、一月と六月に懇親の会食をもつとのことであった。

さて、同行宅での葬儀であるが、葬儀当日の様子から先に見てみると、先ず出棺前の「出立ち」のお齋は女人講（女子衆）がすべて煮炊きをし、コシヨウ汁もしくはユウカン汁も用意する。コシヨウ

汁とはおすましに胡椒を入れたもので、ユウカン汁は醤油と唐辛子にお湯をさしたものである。おそらくもとはユウカン汁のみで、名前も「湯灌」から派生したのではないかと想像できるが、それ以上のこととは不明である。さらに、おこわ（赤飯）も用意される。この葬儀の「出立ち」に赤飯を振舞う習慣は、尾張の最西部地域に残る独特の習俗であるが、これについては、今は餅屋に頼むとのことであった。男衆は役場への届け出や通夜・葬儀の受付、葬儀の司会進行など庶務全般をこなすが、それこそ以前は納棺から、棺をリヤカーに乗せ葬列を組んでのサンマ（村の火葬場）への搬送なども、すべて自分たちで取り仕切ったわけである（現在は愛西市の総合斎苑まで霊柩車で運ぶ）。

また、通夜や火葬後の還骨にもお齋が用意され、これも女人講が煮炊きしたという。今は、これらは割子弁当を頼むようになったそうだが（それでもご飯・味噌汁・漬物は調理する）、通夜の時は喪主・親族が先に食事をとり同行はその世話をし、還骨後は逆に同行が先で、喪主・親族は同行にお礼の気持ちで接待するというのは興味深い。まさに相互扶助の精神がここに現れていると言えよう。なお、通夜と還骨のお勤めについてであるが、今でこそ手次寺の住職を導師に迎えて一緒に『正信偈』『和讃』を勤めるが、か

つては講組の同行だけで勤めたものであった。還骨の際はお勤めの後に「白骨の御文」が続くが、これももともとは同行の代表が拝読したものであったという。つまり、手次寺が行うのは枕勤めと葬儀のお勤めだけで、あとはすべて同行がお互いにお勤めし合うものであったのである。

このようなことは、他の地域ではほとんど消滅してしまったが、実はどこでも見られる姿であった。筆者が今までに調査した講組でも、「昔はこうしたものだ」と同じような話を常に聞いてきた。講組の同行が「お取り持ち」をして助け合う。これが真宗の葬儀の伝統であったことを忘れてはならない。

では、このような伝統は何に由来するのであろうか。次にそれを尋ねていきたいが、ただこれを真宗独自のものととらえるのは短絡的である。『研究報告』第九集で紹介したように、そもそも講とは真宗によって誕生したのではなく、古代からの寺院における仏典講究の集會や仏事法會を意味した言葉であった。それが民間へ浸透するにつれ、信仰上・社会上の様々な集団をさす言葉として中世において一般化したものである。また葬儀も、念仏講や無常講などと称される相互扶助的な信仰共同体が関わる形態が、真宗成立以前にすでに民間に広まりつつ

あった。そして、その源流となるのが平安時代中期の二十五三昧講なのである^{※1}。

ここで、話はそれるが二十五三昧講について少し見ておきたい。二十五三昧講(会)は比叡山横川を中心^{よかわ}に活動した念仏結社で、寛和二(九八六)年五月に、横川首楞嚴院^{しりょうごん}の住僧二十五人を根本結衆として発足した。この結社は毎月十五日に念仏三昧を修して浄土往生を願ったが、同年九月中旬までに源信(恵心僧都)が入会し、行儀作法などが次第に整備され結衆も増加した^{※2}。さて、この講には寛和二年九月十五日に、同行の一人である慶滋保胤^{よしののやすね}が起草した、「横川首楞嚴院二十五三昧起請」という八ヶ条の規定がある。さらにそれは、二年後の永延二年六月十五日に、源信によって十二ヶ条に改訂されるのだが、その第十一條に「可_下結衆之中有_三已_二者^(じか)「時間葬念仏上事」^{※3}とあるのが注目される。つまり「結衆の葬儀を執り行つて念仏せよ」ということとである。これは、八ヶ条「起請」の第八條「可_三結衆没後守_レ義修_レ善事」^{※4}を受けてのものであり、ここでいう念仏は追善の念仏であることに注意しなければならぬが、この二十五三昧講がその後次第に各地に普及し、念仏講が結成されていったので

ある。よって、親鸞聖人の布教により誕生する真宗門徒団の道場での寄合も、このような土壌の上に結成されたのである。葬儀における相互扶助は、真宗の講組織にも、当初から重要な要素として備わっていたと考えられるのである。

哲学者・内山節氏は、群馬県の山村での自身の生活を踏まえて、広く講一般の性格として、信仰集団のほかに、娯楽集団と助け合い集団であったことを挙げるが^{※5}、真宗門徒の寄合も基本的には聞法・求道を目的としながら、同時に共同体の親睦や相互扶助の集まりであったこ



下東川町下組での聞き取りの様子

とを念頭におく必要がある。この講組織に信仰性、娯楽性、相互扶助性が備わっているという指摘は、実際に足を運んで各地の講を調査してみれば、まさに肌で感じる事ができるものである。「お講でいただくご飯が楽しみだった」、「役場からの通達を連絡するなど集落の寄合も兼ねている」といった言葉は幾度となく聞いてきた。

とくに真宗の場合は、教説において「御同朋・御同行」と、同朋意識が強調されてきたこともあり、それが非常に顕著であると感ずる。そればかりでなく、信仰を等しくするという同朋意識がより親睦を深め、それによってさらに相互扶助意識が高められているようにも思われる。また逆に、娯乐的、相互扶助的要素が「寄り合う」という行為を推進し、それが互いの信仰を深めているとも言えよう。いずれにしても、この三つの性格が絡み合いながら真宗の講組織は、信仰かつ地域共同体として生まれ、その土地の人々の生活に浸み込んできたと思われるのである。

ところが、高度経済成長期の工業化・都市化が、従来は当たり前であったこの風景を大きく様変わりさせていった。都市部において葬儀は葬祭業者が取り仕切るようになり、それが地方村落にも広がっていった。さらに、平成の時代に入っ

てからは、もう一つ大きく変化することになる。葬儀会館の存在である。もはや葬儀はサービス業として葬祭業者に委ねられ、葬儀会館がその場所となること为主流となつてしまった。これも調査で何度も耳にしてきたことであるが、「葬儀会館ができてから状況が変わった」、「会館で葬儀をするようになってから、お取り持ちというものが理解してもらえなくなった」。こういった言葉からは、講の相互扶助はもはや必要ないと意識されるようになったと察せられる。それどころか共同体のつながりなど、逆に「煩わしい」ものとしか認識されなくなっているかのようである。

結果、講組織の衰退・消滅へとつながっていくわけだが、その一方で東日本大震災を経験し、共同体の相互扶助が見直されているのも確かなことである。講組織の役割はまだまだ失われてはならず、新たな可能性を秘めているとも言える。

(研究員 小島智)

※1 『国史大辞典』第十一卷(一九九〇年、吉川弘文館)、三三九頁参照。

※2 『国史大辞典』第十卷(一九八九年、吉川弘文館)、八七八頁参照。

※3 『恵心僧都全集』第一卷(一九二七年、比叡山図書刊行所)、三四七頁。

※4 『恵心僧都全集』第一卷、三五六頁。

※5 内山節『共同体の基礎理論―自然と人間の基層から』(二〇一〇年、農山漁村文化協会) 第一部第五章参照。

現代社会と真宗教化 報告

第6回 自死者追悼法要

「いのちの日 いのちの時間」(12月3日) 事前学習会(11月20日)

主催 いのちに向き合う宗教者の会 後援 名古屋教区教化センター

家族や友人、恋人が自死でこの世を去っていく。遺族は日常の中で突如起きた事実を受け止めきれず、自らを責め、社会から孤立し、ついには生きる意欲さえ失ってしまう。

今年で6回目を数える自死者追悼法要に先立ち、「いのちに向き合う宗教者の会」では、11月20日、鷹見有紀子氏(「リメンバー名古屋自死遺族の会」共同代表)を招き事前学習会を開催。自らも自死遺族である鷹見氏からの、葬儀における焼香時の立礼や答礼挨拶での身心の負担や、場合によっては法話が悲しみや自責の念に苦しむ自死遺族をさらに追い詰めるという指摘をいただいた。

12月3日の法要当日、亡き人と自分自身の生まれた意味を見出そうと、宗派を超えて集った僧侶とともに、ご遺族らがご尊前で静かにいのちに向き合った。「ともに悲しみに向き合いたい」という会員の姿勢によってか、法要後の茶話会では「苦しいのは私だけじゃなかった」「日頃封印している気持ちをここでは打ち明けられる」との声が聞かれた。

様々な葬送儀礼に携わる者、何より仏法に生きる者として、ご遺族(ご門徒)とどう関わり、どう応えるのか。なぜ儀式が生まれ、営まれてきたのか。今一度確かめる必要があると感じた。

(研究員 大河内 真慈)



第26回平和展「戦争と歩んだ教育」

日時 3月18日(水)～24日(火)

午前10時～午後6時

※開会式 18日午前11時 ※閉会式 24日午後5時

会場 名古屋教務所1階 議事堂

入場無料

《展示内容》

◆特別展:戦争教育

◆第1章:新資料紹介(大垣教区より)

天皇教と仏教 学校の戦争教育
大谷派僧侶と戦争教育

◆第2章:日本宗教の占領地活動

宗教と宣撫工作 占領地の日本語教育

◆第3章:現代

社会問題(人権・平和) 大谷派の課題

主催 名古屋教区教化センター

協力 名古屋教区教化委員会、名古屋別院

INFORMATION

教化センター日報

■2014年9月～11月

9月5日 研究生・実習「真宗門徒講座(宗祖親鸞聖人 生涯と教え⑤)」

8日 研究生・学習会「真宗本廟一日参拝 事前現地研修」

研究業務「平和展」学習会

10日 HP「お東ネット」会議

19日 教化研修「聖典研修①」(竹橋太氏)

22日 研究業務「平和展」学習会

24日 研究生・学習会「真宗本廟一日参拝 事前学習」

29日 研究業務「自死遺族わかちあいの会」後援

研究業務「平和展」学習会

10月2日 研究生・実習「真宗本廟一日参拝」

6日 職員研修会「差別と私③」

7日 研究業務「平和展」学習会

16日 研究生・実習「真宗門徒講座(宗祖親鸞聖人 生涯と教え⑥)」

17日 研究業務「自死者追悼法要 事前打合せ」後援

30日 教化研修「聖典研修②」(廣瀬惺氏)

11月10日 研究業務「平和展」学習会

13日 研究生・実習「真宗門徒講座(宗祖親鸞聖人 生涯と教え⑦)」

17日 研究業務「平和展」学習会

18日 研究生・教化研修「解放運動推進要員研修」参加

20日 研究業務「自死者追悼法要事前学習会」後援

お知らせ

●事務休暇について

・冬期休暇:2014年12月27日(土)～2015年1月6日(火)

・午後5時閉館:2015年1月7日(水)、2月9日(月)

・臨時閉館(図書整理のため):2015年2月7日(土)、14日(土)

●図書整理に伴うお知らせとお願い

・図書整理(図書・視聴覚教材及び資料の貸出停止期間):2015年2月2日(月)～2月14日(土)

※上記期間中は、教化センターの蔵書、視聴覚教材及び資料の整理を行いますので、貸出を停止させていただきます。

・借受中の書籍などをご返却ください

図書整理を行うため、お手元に借受中の書籍及び視聴覚教材がございましたら1月31日(土)までにご返却ください。

公開講座のご案内

◆聖典研修『仏説阿弥陀経』—その教義と真宗の儀式—

第4回 1月23日(金)

竹橋 太氏(儀式指導研究所研究員)

日 程 講義:午後6時～7時20分

功究・座談:7時40分～8時30分

第5回 2月19日(木)

廣瀬 惺氏(同朋大学特任教授)

会 場 名古屋教務所1階 議事堂

第6回 4月16日(木)

廣瀬 惺氏(同朋大学特任教授)

持ち物 『真宗聖典』

(全8回 第7回 5月15日、第8回 6月18日)

聴講料 500円

※教師陸補のための聴講証発行研修

《編集子雑感》

「苦」を、どう受け取っているか、という問いをいただいた。悩みはたくさんあるし次から次へと出てくるが、それを苦しんでいるかと言えば、わからなくなってくる。その問いをくださった先生は、さらに「お釈迦さまは覚ったのち、もつと苦しんだのではないか」と。「苦」と縁のない存在になられたようだが、それは一切皆苦と矛盾するようにも思う。だとしたら、お釈迦さまは、どのように苦しまれたのだろうか。

自分より、お釈迦さまの「苦」の方が気になってきた。(り)

■教化センター

〈開館〉月～金曜日 10:00～21:00

土曜日 10:00～13:00

(日曜日・祝日休館 ※臨時休館あり)

〈貸し出し〉書籍・2週間、視聴覚・1週間

～お気軽にご来館ください～

■名古屋別院・名古屋教区・教化センターホームページ【お東ネット】<http://www.ohigashi.net>

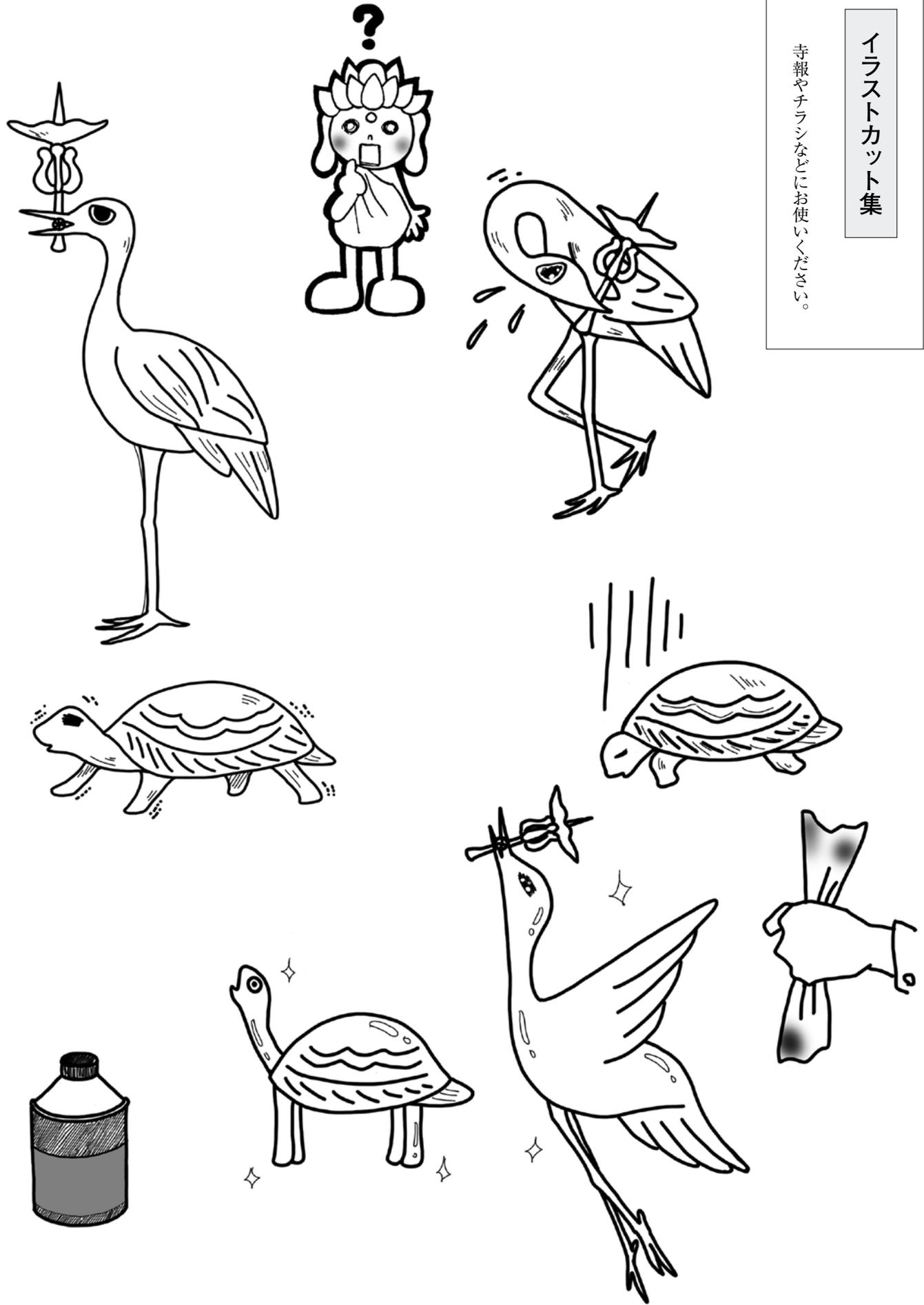
■お東ネット内で、教化センター所蔵図書・視聴覚教材を検索できます。

お東ネット

検索

イラストカット集

寺報やチラシなどにお使いください。



- ・データを希望される場合はお問い合わせください。
- ・差支えなければ、イラストを使用された場合、教化センターまでお知らせいただくとともに、イラストを使用した印刷物などもお寄せください。

※用途にあわせて、切り貼りなどしてご使用いただけます。
※あくまでもイメージです。ご了承の上お使いください。